

# 母語(アラビア語)を糧に育つ子どもたちを 支えられる社会に

季刊アラブ

2023年冬号(No.182)

田浪 亜央江

広島市立大学国際学部准教授

## 「アナーラ」設立の背景

筆者の住む広島を拠点として、日本にいるアラブの子どもに母語のアラビア語教育を無償で行うオンラインのグループ。ぼんやりとそんなイメージが最初に浮かんだのは、ちょうど2年前の今頃である。筆者の在職する大学でアラビア語を教えているシリア人のズィヤードさんからよく聞かされたのが、小学生の子ども4人が日本の学校に通いつつ、アラビア語の読み書きを学び続けることの大変さだ。元気のいい子どもたちはみな日本生まれで、特に小学校に通うようになってからは、「下ネタ」含め子どものあいだの流行り言葉をバンバン使いながら、言葉(日本語)で大人の気を引こうとする。広島に移って6年目の筆者とは違い、広島弁も自然に使える。シリア時代から日本語を専攻していたズィヤードさんだが、子どもには一貫してアラビア語で話しかけるようにしている。しかし子どもの返事は日本語になることも増えた。日々成長する彼らの思考の幅を広げるのは、圧倒的に日本語のように見える。

それまでは子どもたちに学ばせていた別のオンラインのアラビア語教室があった。もともと無償で始まったが有料のシステムへと移行してしまい、生活に余裕のないズィヤードさんは困惑した。それはズィヤードさんに限らず、彼のまわりのアラブ人も同様だ。ならばズィヤードさんを中心に、子どもたちの親の中で先生役になれる人を他にも探し、自分たちでアラビア語教室を立ち上げよう。むろん先生になってくれる人にも生活があるし、無償のボランティアではなく、責任ある「仕事」として関わってもらおう。そのためには資金が必要なので、資金調達や経理を含めたマネジメントは筆者が引き受けることにした。こうして2021年4月に「アラブの子どものための母語教育協会(略称:アナーラ)」を立ち上げてクラウドファンディ

ングを開始し、集まったお金のほとんどを人件費に充てながら今日まで活動を続けて来た。

## オンラインで学ぶ・教える

オンラインだから広島に限定する必要はなく、生徒の80%は広島県外、その半数が東京、千葉、神奈川など首都圏在住だ。知り合いの数家族から口コミで広がり、2022年12月現在の生徒数は44人。小学1年から6年まで各1クラス、人数は1クラス5人まで、と決めていたが、申し込みを断れずに6人になったクラスもある。子どもがまだ小さい家庭が多く、高学年になると他の選択肢もあるためか、申し込みは低学年のクラスに偏りがちだ。現在は1、2年生は2クラスずつ、計8クラスにした。当初2人だった先生も、現在は4人になっている。人数を多く集めることが目的ではなく、寄付頼りの現状では今の規模くらいがちょうど良い。

当初は生徒も先生もシリア人だけだったので、テキストはシリア教育省が刊行している教科書のPDF版を、同省サイトからダウンロードしている。今ではエジプト人やパレスチナ人、スーダン人の子どももいるが、シリアのアラビア語教育への信頼が高いこともあって、この教科書を使うことについては肯定的だ。紙の冊子のほうが使いやすいので、人数分をコピーして手作業で製本し、学期ごとに各家庭に郵送する。ほかに自習や宿題のための素材として、「アリフ・バー・ター」というオンラインのアラビア語教材を使っているが、これは内容が充実していて子どもを飽きさせない。会として利用料を払い、生徒にアカウントを割り当てている。

先生4人のうち、3人は生徒の親だ。教育経験のある人を探し、きちんと履歴書を書いてもらい、面談して話し合いの上で採用した。たかだか小学生に母語を教えることなど誰でも出来る、などと

思う人がいたら、それは何語であれ語学を自分で教えたことのない人だろう。実際、長続きしなかった先生も何人かいる。まずはオンラインで教えることの技術的なハードルがあるが、これは比較的すぐに慣れる。もともと自国を離れた暮らしの中で通信技術の経験値を高めているから、コロナ禍になって急速にオンライン授業を始めた日本の教育関係者よりも、ずっと器用で臨機応変に振舞える人が多い。しかし、子どもたちに合った言葉遣いや適切な距離の取り方、褒めたり励ましたりしながらやる気を引き出し誘導するような応答の仕方は、誰もが心得ているわけではない。そして何よりも、このプロジェクトの趣旨に強く共感し、使命感をもてるかどうかが大切である。

各クラスは隔日で週3回、一回あたり1時間だ。学校の宿題その他の時間を考えると、このくらいが適切だろうと判断した。低学年の子どもの場合は親のサポートも必要だから、週3回は大変だという親もいる一方で、これでは足りない、毎日やって欲しいという親もいる。習い事や部活動の有無など、学校以外の時間の使い方は日本の家庭でもさまざまだが、アナーラに参加する家庭の場合、それぞれの事情の違いはもっと複雑だ。親の仕事の都合にも左右されるし、来日時の子どもの年齢や、アラビア語の読み書きに対する優先順位の付け方の違いもある。

## 不明瞭な見通しのなかで育つ子ども

シリア人を核にアナーラが始まったということは、2011年以降のシリアの状況と切り離せない。多くが留学生や研修生とその家族という立場ではあるが、そういうかたちをとって国外に出ざるを得なかった側面もある。理系の専門教育を受ける父親とその妻子というパターンが多く、父親は英語で学位を取るからたいてい日本語をあまり学んでいない。その後日本に残るかどうかは日本で就職できるかどうか次第になるが、日本語が出来ないと就職のハードルが高いことは、この時点で思い知る。筆者が広島で親しくなったエジプト人は、日本での就職を希望しながら果たせず、来日前にしばらくいたトルコに戻り、結局帰国した。シリア人の場合はまだまだ帰国できる状況にないから、学歴に見合った就職が決まらなくともそのま



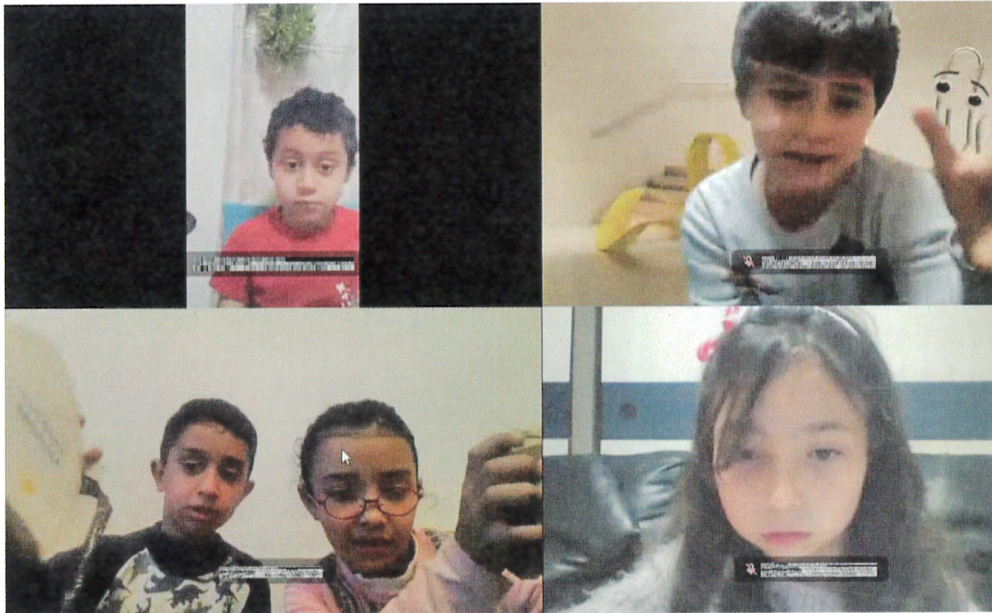
新学期前に各家庭に送付する手作り教科書（筆者提供）

ま日本に残るしかない。広島にはこうして、配送センターや自動車部品工場などで働く高学歴のシリア人がある。もともとずっと日本にいるつもりではなく、帰国できる状況になればそうするつもりだが、それがいつになるのかの目途もつかない。

今後の生活の見通しが不明瞭で、数年後に住んでいるのが日本なのか出身国なのか第三国なのかさえはっきりしないことは、子どもにどの言語を優先的に学ばせるかの選択を難しくする。語学そのものではなく、そもそも日本での生活自体の厳しさやその背景の複雑さこそが学習を難しくする。

十分ではないにせよ、子どもたちはそれまでアラビア語の読み書きの勉強をして来ており、今後学年が進んでも継続して学べる機会にする、というのがアナーラの建てつけだった。教科書に従うなら、文字の書き方やつなげ方は、1年生の後期の半ばまでには終わる。だが、それまでのアラビア語の家庭学習の進捗にはバラつきがあり、2年生のクラスでもまだ文字がしっかり書けない子が多かったから、1年後期の教科書を使った。現在でも例えば、文字の読み書きがほとんど出来ず、1年のクラスに入った4年生の子がいる。その子の家庭の場合、将来のことを考えて、アラビア語の読み書き以上に幼い時から英語を優先させているという。

英語優先に加え、来日時の子どもの年齢が比較的大きいという場合はさらに難しい。Sさん一家はシリア危機のために国を出て、日本に来る前はレバノンにいた。6年生の時に来日し、現在15歳（中学3年生）の息子のYさんは、レバノンでは英語で教育を受けていたため、読み書きはア



1年生のクラスのオンライン発表会の一場面。朗読した後に自分の趣味（工作）を発表している（筆者提供）

ラビア語よりも英語のほうがずっとできる。親とのコミュニケーションはアラビア語だが、思春期のせい最近あまり口をきかないという。

優等生だったというYさんを挫折させたのは、日本の小学校の状況だ。日本語はほとんどできないが英語は流暢なこのシリア人の生徒に、日本のクラスメートは誰も英語で話しかけようとしなかった。1400人の生徒がいるマンモス校で、一人の友だちも出来なかったという。首都圏などでは事情も違うはずだが、広島この学校では日本語の補習クラスもなかった。昼間、分からない日本語の授業をじっと聞き、自宅学習は英語で行なう。Yさんはアナーラの6年生向けのクラスに入ったが、こうしたYさんの状況を知ると、アナーラが関わられるのはごく限られたことだけなのだと思う。

## 自信をもって生きてゆけるために

発足当初、高学年の授業はともかく、低学年の授業の騒がしさ、カオスぶりは衝撃的だった。マイクもカメラもオンの状態でやることになっているから、画面の向こうで動き回っている子どもも見えるし、雑音もすさまじい。だが先生たちは冷静で、生徒たちにマイクの調節を指示し、画面に目を引く絵を出したりして子どもたちを落ち着けてゆく。結局、オンライン授業と言えれば大学生しか相手をしたことのない筆者のほうが経験不足なのだ。ふらふらしているように見える子どもも自分の番になると素直に音読するし、質問には皆が

一斉に声を上げるなど反応がいい。形式的な礼儀正しさが求められる日本の学校教育とは全く違うのだ。

一年が経った段階で、各クラスの学習発表会を行った。軌道に乗り始めてからは、授業運営は先生たちに任せるようになったので、久しぶりの子どもたちとの再会だ。詩を朗読する子、自分の描いた絵を見せて説

明する子。発表会というかたちのせいもあるが、みな一年前よりずっと落ち着き、成長したように見える。

6年生のクラスでは、久しぶりにYさんも見た。ややシャイなようだが、先生と親しげに話す様子に安心した。親以外にアラビア語で話せる大人の存在、という意味でもアナーラの先生は重要だと気付いたのはこの時だ。Yさんはその後、父親のSさんの仕事の都合で大阪に移り、日本語の補習塾に通い始めたと聞く。アナーラでは最近、中学一年生の教科書を使う特別クラスを作ったが、Yさんもそれに参加している。

この子たちは今後、どう生きて行くことになるのだろう。この不穏な世界で先行きが知れないことは、もともとこの社会にいる私たちだって同じことだ。ともかくアナーラとしては、母語で情報を得て、論理的に思考し、言いたいことをきちんと表現できる力をつける支援を続けるしかない。どの国や地域で暮らすにせよ、母語で満たされた自分の世界を確保し、自分たちの文化をもっていることは、堂々と自信をもって生きてゆくための力になるだろう。アラブの子どもたちが母語を糧に生きてゆくことを支えられる社会の一員でありたいと願う。



たなみ・あおえ

広島市立大学国際学部准教授。東京外国語大学在学中にシリア留学。一橋大学言語社会研究科在籍中に、パレスチナ（イスラエル）留学。現代パレスチナ文化研究と、委任統治期の社会文化研究。